

レポート 「宮城県を元気にする高知応援隊」

入交グループ本社(株)
業務部 黒川真介

現地入りチーム長補佐
宿泊・交通担当責任者
気仙沼チーム調理班長

2011年6月17日～19日の3日間「宮城県を元気にする高知応援隊(57名)」の一員として被災地(宮城県)にてボランティア活動を行ってきましてのご報告致します。

まず、今回宮城県に行くことになるきっかけは、地震から2カ月後に高知市で開催した「東日本大震災支援フォーラム」に参加したことでした。当日600名を集めたフォーラムには、宮城県議会議員の畠山議長(気仙沼市)と、安部県議(松島町)が来高され、テレビや新聞等で報道されない被災地の生の状況、教訓を聞かせて頂いた縁もあり、フォーラムからさらに発展して「実際に現地に行かないとわからないことがある」という気運が高まり、高知応援隊が結成されるに至りました。

活動の内容は大まかに、被災地視察と炊き出しボランティア、そして個々の活動の3本柱でありましたが、私は応援隊の役員として、現地入り担当、宿泊交通担当、炊き出し調理班長としての役目があり、出発前から幾度となく夜遅くまでの打ち合わせを重ね準備を進めてきました。とにかく現地の状況がつかめず、情報も錯綜し、また変更に次ぐ変更を余儀なくされました。わかりやすい例をあげると、炊き出しを行う場所は水道が使える?使えない?移動経路はう回路が多くトラックが通行できない?渋滞が多く時間が読めない、避難所の人数が刻々と変化する、などの不確定要素が多いため、結局は57名のメンバーに対して「予定変更は当たり前、現場での判断は皆さんにかかっています。」とお願いし、意識の高揚を図りました。しかしこれが功を奏して「本来被災地支援が目的であるのに地元で迷惑をかけられない、なんとかやりきろうぜ!」というチームワーク向上へとつなげることができました。

初日は17日に宮城県入りしバスにて、多賀城市、七ヶ浜町、塩竈市、東松島市の被災状況の視察をしました。仙台駅周辺はまるで何事もなかったような日常がありました。バスが徐々に被災エリアに近づくにつれ、瓦屋根が崩れた家屋、一方向に無理やり押し倒されたフェンス、塩害で枯れた植栽、横転したままの車などが目につくようになってきて、バスのあちこちから「うわー」とか「すごいなー」などの言葉が聞こえてきました。しかし、さらにバスが進むと状況はどんどんと悪化してきて、多賀城市ではどこも1階部分は2m程度の津波跡が見られ、閉鎖した店舗やコンパネをはりつけ応急処置をした家屋ばかりとなり、その頃にはメンバーからは声なくなっていました。

七ヶ浜町では海水浴場だった場所にバスを止め下車しました。防波堤手前の住宅ゾーンに家屋は跡かたも無く、基礎が無残に残っているだけでした。津波に破壊された防波堤の横から砂浜に入ると、貨物コンテナがごろごろと砂に埋もれており、まるで映画「猿の惑星」のラストシーンのような光景でした。防波堤には津波避難場所の案内板がありましたが、その避難場所へ続く階段の手すりも途中までは無残に捻じ曲げられており、生と死の境目がそこにはありました。一転して、比較的被害の少なかった松島町に移動し宿泊先の野外活動センターに到着しました。地元の婦人部の方々や安部県議の支援団体など

のご支援を頂き、交流を兼ねた夕食会まで準備していただきました。支援に行つて支援されたわけですが、現地の方からは、「私らがあんたらを支援するのでもっと大変なところの支援をがんばつてきて」と逆に励まされる始末で、地震当日の事、地震で周りの人がどうなったとかといろいろとお話を聞かせていただき自然と涙が溢れてしまいました。

18日は南三陸町と気仙沼市の二手に分かれて炊き出しを行いました。私は調理班長ということもあり、本体よりも早く先に現地入りしたのですが、南三陸町の惨状は強烈でした。テレビで何度も映し出された3階建ての防災庁舎が完全に津波に飲み込まれたあの場所に実際に立つて見て、本当に言葉を無くしました。地震の前には人が行き交っていたであろう場所に人の気配はありません。大量のがれきは道を確保するため応急的に横に寄せられており、全てが無機質で風景に全く色がありませんでした。そんながれきの中に子供用のコップを見つけ、あまりに無機質な中で突然「色」を見つけてしまうと今度は逆に、ここに小さな子供がいたんだろうな、その子はどうしてるのかなとコップの向こう側の生活を思いめぐらせ胸が締め付けられました。でもつらいことばかりではありませんでした。少し別の場所では、小学校に登校している小学生7～8名の集団を見かけました。赤いランドセル、子供らしいカラフルな服装、そして笑顔。談笑しながら歩く姿を見て、悲惨な風景とはあまりにミスマッチでしたが、きっと彼らが町の色を取り戻していくのだなと心強く感じました。きっと大丈夫です。

その後南三陸町での炊き出し段取りを終え引き継ぎをして今度は気仙沼市に移動しました。南三陸町から気仙沼市に通じる海岸線の道路は当然使えません。山伝いに進むのですがそれでも少し低い所となると津波により道が破壊され迂回を余儀なくされます。気仙沼市の被害エリアは広くて、谷あいの場所という場所に津波が駆け上っており段々畑も3段4段と軽く波が到達しておりました。杉木の枝に漁業に使うブイや網が引っ掛かっているのはもはや理解不能です。被害のひどいところ、免れたところと繰り返して、これでもか、これでもかと見せつけられる惨状にはやはり言葉がありません。気仙沼市はまだまだがれき撤去が進んでおらず、自衛隊も含め動ける世代は総動員という感じでした。

気仙沼高校での炊き出しは、自主学習する高校生や避難所で暮らすお年寄りや小学生達が対象となり、こちらから積極的に話しかけたところ皆さん普通に明るかったのが印象的でしたが、会話の中にときおり出てくる「地震のせいで〇〇になった」という話を聞かされると、一見明るく振舞っているけれど、やはり傷は深いのだなと改めて痛感しました。今どきの格好をした高校生ですが、教室と炊き出し会場を何度も行ったり来たりして話かけて来てくれました。おいしい、おいしいと言ってくれ、ありがとう、ありがとうと何度も手を振ってくれました。彼らが明るい限り、気仙沼もきっと大丈夫です。

片づけを終えて最後によさこい踊りを一緒に踊りました。避難所の体育館なので「なんだ？うるさいな。」と思った方もいたかもしれません。しかし、よさこい節が何度も繰り返され次第に現地の方も一緒に踊り出し最後にはみな笑顔となりました。実は、応援隊のメンバーの中には踊ったことない、という人もいましたが最後はやはり笑顔となり、間違いなく心が通じ合いました。また、恥ずかしがってなかなか踊ろうとしなかった小学生達でしたが、最後は踊りの輪に交じり、「もう一回踊ろう！」とまで。プレゼントした鳴子を目一杯鳴らしてバスの見送りをしてくれたのは本当にうれしかったです。被災地に入った有名人や芸能人が良く「逆に元気をもらった」というコメントを見かけるとは思いますが、「ああこういうことなんだな。」と共感できました。

19日は、早朝に宿泊地にて全体解散をしその後は個別行動となりました。私は多賀城市のボランティアセンターに登録しがれき撤去等のボランティアを行いました。完全に浸水したマンションの一階に住む方からの依頼で、がれき、ユニットバス、天井など全ての内装物を運び出す作業でした。10人のチーム編成でしたが、とび職の格好をした若い二人組（ちょっと怖いような風体）が現場を仕切ってくれ、

さすがに段取り良く昼前には片づけを終えることができました。聞くと地元多賀城市民で積極的に参加していて「仕事もボランティアも区別はない、やれることをやるだけ」という力強い言葉に深く尊敬の念を抱きました。

その後、ほこりまみれのまま最終便で帰高しましたが、家について気が抜けたのか子供を寝かしつけているうちにお風呂にも入らぬまま眠り込んでしまいました・・・。

近い将来必ず来ると言われる南海地震ですが、根拠のない「俺は大丈夫やろ」という楽観、また「1000年に一度のあんな津波が来たら逃げる術はない。」というあきらめ、これらは私の心のどこかにありましたが、今回の応援隊を通じて、それは課題から逃げているだけだ、逃げていても何も変わらないのだ、ということ、惨状を目の前に叩きつけられて思い知らされました。確かに自然の前では人間は非力です。それも良くわかりました。日本で最も災害対策に力を注いできた宮城県知事から、力及ばず申し訳ない、というようなコメントがありましたが、準備をしてきたからこそ被害を軽減できたし、復興のスピードにも影響していると私は思います。自分の周りでこれからできることはまだまだたくさんあります。非力な人間がほんの少しのことに一生懸命取り組み、到底敵わない自然の前であがいてみせること、これこそが最も重要なプロセスであり、大げさに言えば人類の歴史なのかもしれません。自分の人生だけでなく、家族、地域、高知県、日本国の一員として、非力な一人一人が助け合え、という神が与えた試練ではないだろうかとさえ本心から思いました。そして、被災した方々は着実に一步一步復興の歩みを進めています。彼らと話し、彼らの頑張っている姿を見て学んだ教訓、経験を高知でどう生かせるのか、ということは彼らとの約束を果たすことでありまた今後のライフワークとなりました。今後は今できることを少しずつ積み重ねて行きたいと思います。まだ頭の中が充分整理されておりませんが、時系列のご報告とさせていただきます。



多賀城市（仙台から数十分） どの建物も1階部分は津波を直撃している



七ヶ浜 津波により根こそぎ倒された松林



七ヶ浜 何もなくなった防波堤（海側）を望む風景



七ヶ浜 防波堤の内側 住宅エリア まだ新しい基礎だけが残る



七ヶ浜 破壊された防波堤を応急復旧したところ



七ヶ浜 津波で防波堤が破壊され陸地が削り取られ、もう水は引きそうもない



七ヶ浜 海水浴場に転がる貨物コンテナ



塩竈市 道に転がっている船



南三陸町 有名な防災庁舎



南三陸町 破壊された水門 屋上に引っ掛かったブイ



南三陸町 営業再開したガソリンスタンド



南三陸町 がれき撤去は確実に進んでいるがまだまだです



南三陸町 3階建の屋上に流された乗用車



南三陸町 木造建築物は皆無



南三陸町 津波は屋根の高さを超えています



南三陸町 高台にも津波は到達した



南三陸町 避難所に設置された自衛隊の給水車（水道は復旧していない）



南三陸町 志津川高校避難所の皆さん（明るい）



気仙沼市郊外 被害エリアが広くてがれき撤去は進んでいない



気仙沼市 1階部分は軒並み破壊されている



気仙沼市 山道でこの状況



気仙沼市 津波が駆け上り、坂道の手すりもぐにやぐにや



気仙沼市 畑だったところが田んぼのようになっている



気仙沼高校生とリープルをネタに談笑

以上が社内報向け部分です。

以下書式に従いまして

1. ご自身の目的、目標達成状況についてご記入ください。
 - ① 役員として企画会議（出発までの段取り等）に参加し、他役員から多くを学べた。
 - ② 宿泊・交通担当だったが、他役員に依存してしまっていた。19日の羽田～高知のチケット発券にトラブルがあり対応が遅れてしまった。
 - ③ 調理班長として炊き出しについては問題なくオペレーションできた。
 - ④ 日程上の制約があったが、できれば、がれき撤去ボランティアは気仙沼市や南三陸町で行いたかった。
 - ⑤ 気仙沼チームの料理が余った件について、事前情報収集と事後対応策を図れたのではないだろうか、反省点である。
 - ⑥ 有る程度の予想をしていた「段取り変え」ではあったが、事前情報収集の精度を高めたら振り回される度合いが減ったのではないだろうか。

2. 活動中の難しかった点、苦勞した点についてご記入ください。
 - ① 時間が少なかった。もう少し時間的余裕があればできたことがもっとあったと思う。（今回の場合、日程ありきなので無理もないことではあるが・・・）

以上